シリーズ
「グループで聖書を読むということ」

かつて、聖書を読む会を普及した宣教師の先生がたは KGK（キリスト者学生会）の協力主事でした。その先生たちは、学生のために作った手引を、近隣の方々との聖研にも用い、それはやがて「聖書を読む会」の働きへとつながっていきます。

それから 40 年余りたった現代、「今の若い人たちは、グループ聖研のような地味な学びは苦手なのでは？」と思っていませんか。実は、今でも聖研をすることは大学生の間で励まされていますし、学生の成長のために有益です。今回は、実際に学生と関わって来られた元 KGK 主事の中西兄に、その経験の中から現代の若い方たちの特長や課題などを書いていただきました。

教会の青年たちを理解し、聖研をすることを励ますためにも参考になればと思います。

現代キリスト者学生における
グループ聖書研究についての考察

元 KGK 主事　聖書宣教会研修生
中西 健彦

今春まで、私は KGK 主事として大学生伝道に携わってきました。この記事では、私が学生達と聖研をする際に気付かされたことをお分かちしたいと思います。

Ⅰ. 現代キリスト者学生の課題
～聖書の読み方に関して～

①活字離れする学生達

まず取り上げたいことは「活字離れ」という傾向です。本を読む人・読まない人の二極化が進んでおり、全体としては活字離れの傾向を感じます。インターネット・スマホ・テレビなどに親しむ中で、読書の機会が減っているのが原因の一つでしょうか。

その傾向は、聖書を読む事にも表れます。文章を読む上での基本的な読解力が欠けていたり、聖書知識が断片的で、聖書の全体像をつかめずにいます。おそらく KGK に集う学生の大半は、継続して聖書通読した経験がないと思われます。

②クリスチャンホーム出身学生の感覚的理解

その一方で、「自分はそれなりに聖書を知っている」という自覚のある人も少なくありません。なぜなら、幼い頃から教会学校で聖書の話を聞いて育ち、既に大抵の聖書箇所を何となく聞いたことがあるからです。しかし、ある聖書テキストを、その置かれた文脈から理解するよりも、自分の経験や蓄えられた知識からそれらしいことを語る「バイブルトーク」に終始することもしばしばです。

③ポストモダンの影響

ポストモダンの時代においては、論理的な事柄よりも感覚的なものが重視され、楽しい雰囲気・わかりやすさ・インパクトの強さが受け入れられます。このような傾向に合わせた伝道の方法で成功した例は少なくないと思います。しかし、一方で時代の雰囲気に合わせて感覚的なアプローチを押し進めるあまり、聖書理解が表面的になり、みことばの奥行きを見落としてしまう危険性もあります。

また、ポストモダンにおける聖書の読み方の一つに「読み手応答批評」というものがあります。これは、ある文章を読む時に、その伝えたいメッセージは読み手が決定する、つまりそれぞれ違う受け取り方があってよい、とする考え方です。この影響を受け、偏って主観的な読み方をする人に「聖書は本当にそのように言っているのか？」と問う時に、緊張を覚えることもあります。

④福音派における反知性主義の台頭

さらに、福音派における「反知性主義」という課題も指摘したいと思います。これは、考えることよりも感性の方が大切、というあ

り方を推し進めた結果、知性を用いることを「頭でっかち」と批判し、知性を軽視する傾向が生まれました。しかし、知性を用いるということは自分の限界を認めつつ祈りの中で聖霊の助けを頂き、みことばの意味を真摯に考え、向き合うことです。そのプロセスにおいて知性は重要な位置を占めているはずです。

Ⅱ．聖書研究における課題
～学内訪問の現場にて～

①つまらない聖研

KGK 活動の基本である聖研ですが、中には面白みに欠けるものもあります。それは、模範解答や正論ばかり話されて自分の生活とリンクしない聖研です。学生の中には「聖研に面白さを感じたことがない」という人もいます。しかし、実際に質の高い聖研を経験することで、聖研への向き合い方が劇的に変わる場合も少なくありません。

②言葉化することを諦める

自分の言葉で信仰の内容をうまく表現できないこともあります。もちろん、これはどんな人でもある程度の努力が必要ですが、中には「信仰は言葉じゃない」と初めから言葉化を諦めるケースもあります。しかし、学生の答えを忍耐強く待ちつつ「あなたの言いたい事はこのような感じ？」と表現を助けていくと、彼らが自分の思考に合う言葉を獲得し、新たな信仰理解へと進んでいくことも多いのです。

③独白で終わる聖研

また、面白い聖研をするためには、まず参加者同士が心を開いて話せる関係作りが必要です。しかし時に聖研や分かち合いで、それぞれが自分の感想を言うだけで、特にレスポンスもなく、ポツリポツリと独白に終始することもあります。お互いに傷つかない、干渉しない距離にとどまるのです。これは個人主義の影響、人間関係の築き方の課題、あるいは議論をすることへの苦手意識も関係しているかもしれません。聖研を行う以前に、互いが安心して話せる雰囲気を作り出すのも大切でしょう。

④「観察→解釈→適用」の意識の欠如

さらに、実際に聖研問題を解く中で考えたい基本は、聖研の問いの種類を区別することですが、学生達が「観察→解釈→適用」という帰納的聖書研究の３つのステップを知らないことがあります。「観察」が弱いと参加者のおしゃべりに終始し、「解釈」が甘いと聖書の表面的な理解で終わり、「適用」がないと生活と乖離(かいり)した単なるお勉強になってしまいます。観察・解釈・適用の問いのバランスを考えることは、聖研が充実するか否かの鍵になるでしょう。

⑤伝道の視点を欠く聖研

聖研は、クリスチャンと未信者が共に聖書を開く格好の伝道の場です。しかし迎える学生の側では、「聖研のような地味なもので人が救われるはずがない」という前提があり、そもそも聖研は伝道の場としてふさわしくないと諦める人もいます。未信者への配慮と同時に、伝道の場としての自覚と積極的なアプローチを励ます必要を感じています。

Ⅲ．グループ聖書研究の持つ可能性

聖書研究は地味でありながら、日本社会で極めて特殊な伝道と信仰成長の場です。この時代特有の課題は色々とあるにせよ、やはりグループ聖研には「聖書を読む力」を身につける上での大きな可能性があると思うのです。主催者が、参加者の主体性を励ましつつ適切な問いを投げかけ続けるならば、一人ひとりの「聖書の読み方」の思考回路が少しずつ開かれていくと信じています。

「聖書を読む力」とは一体どのようなものでしょうか。私が考える１つの姿は、聖書の文脈を読み解いて豊かな水脈から神のみここ

ろを汲み取れる力を持ち、それでいて机上の空論ではなく、今を生きる言葉で神の言葉を分かち合うことが出来る、そのような力のことです。

みことばの内容は自分の想像を遥かに超えており、丹念に読む中でその豊かさを知ることができる。「何度も聞いたことのある箇所が、実はこれほど深いことを言っていたのか…！」という深い納得を伴った感動を経験して欲しい。これまで何となく聞いてきた知識についても、聖書からその土台を再構築して欲しい。グループ聖研の大きな可能性を覚えつつ、みことばの深い理解を励ましていきたいと思うのです。

そして、聖書の深さに目を開かれた参加者が、また、新しく良い聖研を主催し、その場に、まだ主を知らない人々も加わる中で、宣教のわざが進められていく事を願っています。

次は、学内聖研でその生き方が問われた学生の証です。若い方々が人生の土台を築く時期に、聖研の場がよい励ましとチャレンジの場となっていることを知り、嬉しく思います。

大学での聖書研究の恵み

JECA 永福南キリスト教会
櫛田 みずき(大学 4 年生)

大学生活での恵みについて考えるとき、学内の聖書研究会は私にとって大きな意味のある場所です。

大学へ入学した頃の私は口先では「罪人の私を赦してください」と言いつつも、心では自分の罪について本当の意味で理解できていませんでした。しかし聖書研究会に参加する中で、メンバーの一人を愛せないでいる自分と出会いました。今まで自分は、愛しやすい人を愛してきただけだということが分かりました。「自分を愛してくれる者を愛したからといって、何の報いが受けられるでしょう。取税人でも、同じことをしているではありませんか。(マタイ 5:46)」と語られ、自分自身がむなしく思えました。

それから私は、学生が学び合うこと、愛し合うこと、仕え合うことについて真剣に考えるようになりました。毎週の聖研が、愛し仕えることを実践するチャレンジの場となりました。「今、心に留めなさい。主は聖所となる宮を建てさせるため、あなたを選ばれた。勇気を出して実行しなさい。(Ⅰ歴代誌 28:10)」というみことばが私をとらえ、学内に神の国を建て上げることを励ましました。

「自分の中に本当の意味で愛はない」と実感した時、私は「あなたの愛を与えて下さい」と祈るようになりました。時間はかかりましたが、愛することが出来なかったその人とも和解することが出来ました。私はいま学内での聖研を楽しみにしています。それは、自分の罪に気づき、弱さを認めた先に用意された神様の私に対するあわれみです。

新年度に入り後輩も増えました。私と同じような悩みを抱えている人に対して私が出来ることはなにか、祈り求める毎日です。神さまが、学生であるいま向き合うべきことを、私たち一人一人にみことばと交わりを通して教えようとしておられると感じます。